

留学速報

Division of Circulatory Physiology, Department of Medicine, College of Physicians & Surgeons, Columbia University in the City of New York, USA

戸高浩司*

米国ニューヨーク市マンハッタンにあるコロンビア大学医学部循環生理部に留学して早4年になります。この部長は心不全に関する研究、著作で有名な Milton Packer 教授で臨床部門の Heart Failure Center の部長兼任です。折りに触れ彼の話をお聴く機会がありますが内容も然る事ながらその話の上手さには感嘆させられます。一度図書館の閲覧室で彼が何やら調べ物をしながら便箋にペンを走らせているのを見つけて遠くから興味深く眺めていたことが有ります。机の上に広げた5-6冊の文献をパラパラとめくっては何か書き、時々立ち上がっては新たに文献を持ってくるという事を暫く続けていました。んー、こんな風にあの面白い review などは執筆されているのかと思うとその classical なやり方に若干驚きました。

実際の私の研究の指導は動物実験主任の Daniel Burkhoff 助教授に受けています。彼は Johns Hopkins 大学の故 Dr. Kiichi Sagawa から続く Pressure-Volume Relationship の専門家で、4年前に自分のラボを主宰するに当たって九州大学で同分野の研究をしていた私に白羽の矢が立ったという所でした。彼はまた Dr. Sagawa 以来の別の伝統を引き継いでおり、アメリカの研究分野の厳しい生存競争を生き抜いてきた人には珍しくとても人柄の良い人です。以前「私は良い研究者である前に良い人間でありたい」と言ったことが有ります。沢山の論文を持つ一流の研究者だからこそ言える言葉かもしれませんが見習いたいものです。実験の手法は摘出イヌ血液交叉灌流心という方法でこ

れ自体は日本でやっていたものと全く同じでしたが、欧米のイヌに対する接し方の違いの為、少なからず戸惑ったことがありました。先ずイヌの購入使用許可を取るのが一苦勞で、実験の主旨、計画を詳細に説明して苦痛を与えないやり方は勿論、何故ラットなどの小動物では代用出来ないのかなどを述べ学内の実験動物使用に関する倫理委員会に申請せねばなりません。挙げ句の果てにこの実験計画なら何頭で十分などと削られたりしました。一番驚いたことは二匹同時に実験室に連れてきて麻酔をしてはいけないと言われたことです(摘出灌流心では一度の実験で二匹のイヌを使います)。理由が一匹目を麻酔するのを二匹目が見て心の傷を負うからということでした。流石にこれには唾然としました。他にも心不全イヌをやつとの思いで作成しよう少し待つて最終スタディーをしようとしていた時に veterinarian から「これ以上苦痛を長引かせられないから今すぐサクリファイ

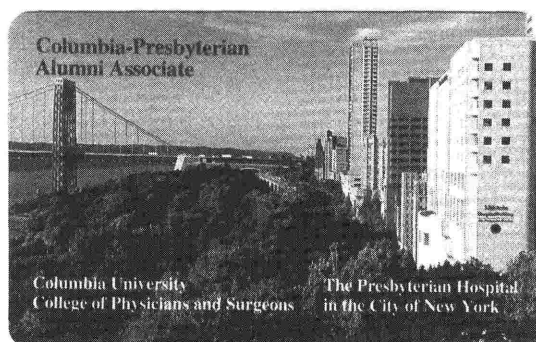


写真1

*九州大学医学部附属病院循環器内科

スしろ」と言われて衝突したりと大変でした。ケージに入れて廊下を運ぶ時鳴き声をあげさせないなど何かにつけ神経を使ったものです。幾つかの projects が走っていますが心不全イヌの心機能への運動訓練の効果など全て心不全を中心とした心機能がらみのものです。現在は length-dependent activation of myocardium を aequorin で細胞内カルシウム変化を見ながら whole heart にて再考する実験に力を注いでいます。イヌの摘出心を灌流回路ごと暗箱に入れてしまうという中々大掛かりな preparation を中国人の technicians 二人と四苦八苦してやっているのですが漸く最近安定した signal が取れるようになりました。摘出単離心筋とはかなり異なった興味深いデータが得られつつあります。Pressure-Volume の時代は終わったというような人も一部にはいますがマイクロからマクロへ外捜するだけでは駄目だという一例だと思います。

さて、コロンビア大学の医学部は本学より更に50ブロック程北にあり、行政区上はハーレムに入

ります。ニューヨークに着いた日に大学を初めて案内されて、環境の悪さに正直驚きました。周辺は主にドミニカからの移民で構成された Hispanic community でアメリカ人であるにも拘らずスペイン語しか喋れない人が沢山います。(因みにニューヨークの人口の半分は何らかの形でスペイン語を解するというのは意外と知られていない事実ではないでしょうか。) 医学部は古くは現在のロックフェラーセンターのある場所からセントラルパーク近くの59丁目に移った後、アメリカ初のメディカルセンター (Columbia-Presbyterian Medical Center; 以前ある日本語の地図に「コロンビア老人病院」と誤訳されており苦笑しました。) として、富豪の地主から寄贈された今の場所に落ち着いたようです。その頃はマンハッタンとはいえ、Washington Heights と名のつく緑豊かな郊外だったとのことです。今ではその名を出すとタクシーが行きたがらないような所になってしまいました。とはいえ人間慣れとは恐ろしい物でそんな所に4年も住んでいますとそれなりに快適に感じるようになりました。家内も今では地下鉄に乗って何処へでも一人で出かけて行きます。私達のアパートはキャンパス内の30階建てビルの22階に有り、前頁の写真にあるような George Washington Bridge を望む Hudson 川に面した bay window からの眺めが自慢です。ヘリコプターが飛んでいるような高さで毎日ご飯を食べるのにももう慣れました。時々エレベーターが故障して歩いて上らないといけなのは困りものですが、ニューヨークは一部の地域、時間帯を選べば日本で伝説のように考えられている程危険な所ではありません。最近では観光客も増えわざわざ私がことわる必要も無いかもしれませんが、例えば全米の都市での犯罪率を出すとニューヨークは真ん中ぐらいになります。最下位近くのニューオーリンズなんかより余程安全かもしれませんが、又これだけの都会にも拘らず街の人は結構親切で地下鉄で席を譲ったりするのは当たり前だったりします。習慣の違いといえればそれまでかもしれませんが一時帰国で日本に帰ったりすると体がぶつかっても何も言わず、すきあらば割り込もうとしたりする人々の振る舞いのがっかりしました。ニューヨークはセントラルパークという巨大な緑地が市の中心に有り、オペラ、ミュージカル、美術館、頻繁に来る一流のアーティスト達などすっか

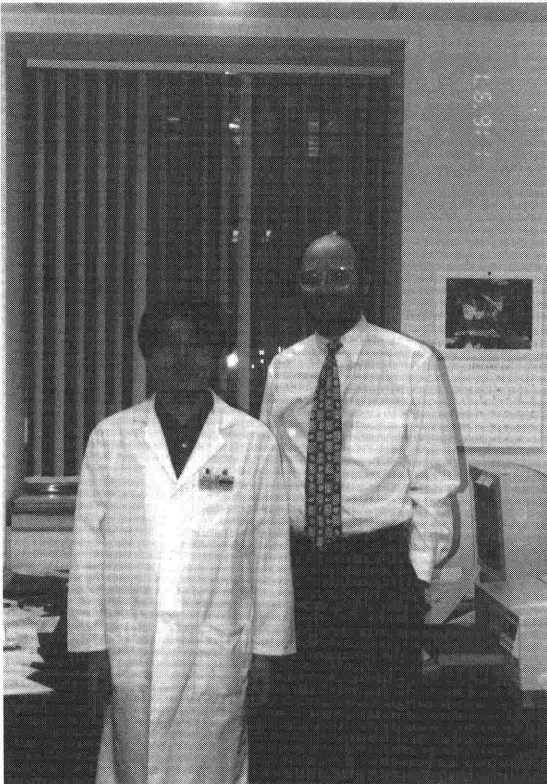


写真2 筆者と Dr. Burkhoff

り気に入ってしまいました。経済的に何とかなら永住したいくらいです。実際日本人で思わず住みついてしまった人は沢山おり、私の友人の職業も宝石のデザイナー、ヘアスタイリスト、不動産屋などかなり変化に富んでいます。こういう人達の話は非常に面白く、もし日本で医者をしていただけなら得られなかった貴重な経験と思っています。

又ニューヨークはチャイナタウンを初めとする Community があるからでしょうか、中国人が多い所です。極論すると人間の4人に1人は中国人です。ので何処に行っても見かけるとは思いますが、

彼らの広い意味での上昇志向の為でしょう、研究室にも MD など高学歴の人達が沢山いてよく働いています。私共のラボも段々増えてきて今では中国語が共通語のようです。教養部時代に冗談で受講した初級中国語がアメリカで役に立つとは思いませんでした。また、彼らの英語には独特の癖があり毎日話しているところらまで he と she の区別がおかしくなってきたりして困っています。

残り少なくなった留学期間ですが十分に活用して帰りたいと思います。